

子育ての不安を軽減する家庭教育支援に関する一考察 (2)

——保護者の境遇と家庭教育との関係に着目して——

志々田 まなみ*

はじめに

本研究は、先に発表した「子育ての不安を軽減する家庭教育支援に関する一考察 (1) —広島県における『子育てや家庭での教育に関するアンケート』の基礎的分析—¹⁾」をふまえつつ、保護者²⁾自身の境遇（現在の就労・経済状況や親自身が養育された家庭での教育経験）と、子育て・家庭での教育の実態との関係に着目しながら、子育ての不安を軽減する家庭教育支援の課題について考察することを目的としている。なおここでは、保護者の子育て不安を構成する要因を、子育て・家庭教育をめぐる悩みと、それに対する苦手・苦痛の意識の2側面で、捉えようとしている。前掲論文ならびに本論で用いる調査データは、広島県教育委員会生涯学習課の協力のもと、2014（平成26）年5月から6月にかけて県内の自治体が実施した「3歳児健康診査」に訪れた保護者を対象に、「子育てや家庭での教育に関するアンケート」を実施して得たものである（有効回答数2,657）。本論の問題意識とも関わるため、基本的な分析結果だけ、ごく簡単にふれておきたい。

保護者に「子育てや家庭での教育で悩みがありますか」と問うと、「たくさんある」（121人：4.9%）、「まあまあある」（1,210人：48.8%）と答えており、53.7%と過半数を超える保護者が悩みを抱えていることがわかった。また、「子育てや家庭での教育を苦手・苦痛だと思うこと

がありますか」とたずねた結果、「とても思う」（61人：2.4%）、「まあまあ思う」（627人：25.2%）と応えており、およそ3割の保護者が子育てや家庭教育を苦手や苦痛だと感じていることがわかった。なお、子育ての悩みを軽減するための相談相手は誰かとたずねると、「配偶者」（1,870人：70.4%）が最も多く、次に「自分の親」（1,816人：68.3%）、「ママ友」³⁾（1,611人：60.6%）と続く。また、子育てや家庭での教育に役立つ情報の入手先として半数以上の保護者があげたものは、「ママ友」（1,752人：65.9%）、次に「家族」（1,525人：57.4%）であることが明らかとなっている。

なお、表1は「子育てや家庭での教育で悩みがありますか」と「子育てや家庭での教育を苦手・苦痛だと思うことがありますか」という2つの質問をクロス集計した結果である。「子育ての悩みも、子育てに対する苦手・苦痛の意識も持っていない」割合が41.6%と最も多く、約4割の保護者が子育て不安をさほど感じることなく子育て活動を行っていることがわかる。「子育ての悩みはあるが、子育てについて苦手・苦痛の意識を持っていない」割合が31.1%と次に高く、3番目は「子育ての悩みがあって、さらに子育てについて苦手・苦痛の意識も持っている」割合で22.5%、最後に「子育ての悩みはないが、子育てに対して苦手・苦痛の意識を持っている」割合で4.9%となっている。本論では、この悩みや苦手・苦痛の意識を持つおよそ6割の保護者たちの子育てをめぐる不安について分析していくこととなる。

* 広島経済大学経済学部教授

表1 子育ての悩みの有無と子育てへの苦手・苦痛の意識のクロス集計 $p < 0.05$

		子育て苦手・苦痛の意識					
悩みの有無	31.1%	ほとんど思わない	そんなに思わない	22.5%	まあまあ思う	とても思う	
	たくさんある	2	25	たくさんある	64	30	
	まあまあある	122	620	まあまあある	434	27	
	41.6%	ほとんど思わない	そんなに思わない	4.9%	まあまあ思う	とても思う	
	あまりない	256	545	あまりない	111	4	
	ほとんどない	166	61	ほとんどない	5	0	

1. 課題の設定

一連の調査結果の傾向から読み取れるのは、保護者が配偶者、親といったごく近い家族からのアドバイスと、「ママ友」といった身近な仲間の情報を頼りにしながら、子育てをしている実態である。こうした私的なつながりを基盤とした相談方法に著しく偏っている状況は、視点を変えれば、配偶者や親といった家族間での人間関係あるいは経済的な問題の発生が、子育て上の不安解消の弊害にもつながっている可能性を窺わせる。また、就労等の事情により同年代の子を持つ保護者どうしがつながる場を利用しづらい環境にいる保護者にも、同様の可能性がある。そこで本論では第一の課題として、父母の就労状況、保護者の年取、年齢等の社会的境遇と、子育て活動の様態や意識との関係性について明らかにすることを設定した。なお、保護者の現在の境遇に関する質問項目は、アンケート票の欄外において「質問は以上ですが、差し支えなければ、次の参考についてもお答えください」と記した上で回答を求め、回収においても個人情報の保護に十分配慮した方法をとったことを付言しておく。

もう一点、近親の者への相談に偏りがちな子育て環境への懸念として、親自身が養育された家庭での教育経験（以下、被養育経験と略記する）が自らの子育て活動に影響する可能性が指摘できる。2015年に実施された広島県内の3歳

児をもつ保護者（有効回答数1,555）を対象とした同種のアンケート調査⁴⁾でも、「子育てや家庭での教育を行う時、親から自分が受けた子育てやアドバイス等をどれくらい参考にしていますか」という質問に対し、「とても参考にしている」（21.8%）、「まあまあ参考にしている」（61.5%）と答えており、8割を超える保護者が自分の被養育経験を参考にしていることが明らかとなっている。

長い間インフォーマルな営みとして続けられてきた家庭での教育スタイルは、少なくとも学校教育のように標準化された指針があるわけではないことから、良いものも悪いものも含めて世代間で受け継がれやすい。加えて、本調査で明らかとなったように、保護者が子育てに悩んだり不安に思ったりした際に家族にアドバイスを求めているだけに、さらにそうした教育スタイルが強化される可能性がある。そこで、保護者の被養育経験と子育て活動との関係性について、本論の2つ目の課題として明らかにしておきたい。なお、誤解のないように言い添えるが、家庭教育というインフォーマルな教育は、家族や民族、地域の文化や価値を尊重すべきものであり、制度化された教育とは一線を画する。本論で取り上げる家庭教育のスタイルは、その行為の内容で善し悪しを判断せず、現在の被養育者（保護者）自身が良い印象をもっているか、悪い印象をもっているかによって選別することとした。

2. 保護者の境遇と子育て活動への意識の関係性

表2、図1は保護者世帯全体の年収（以下、世帯年収と略記する）と年齢とをクロス集計した結果である。全体的傾向として、若年層の保護者ほど、世帯年収の低い層が多い傾向が読み取れるだろう⁵⁾。

表3は世帯年収と父母の就労状況、父と子の別居の状況、子どもの通園・通所状況、通所・通園先とをクロス集計した結果である。世帯年収200万円未満の家庭における母親の就労率は67.8%と他層と比べて最も高く、父親の就労率の低さや父と子が別居している割合が高いことも勘案すると、家族関係において複雑さを抱えたケースが多いことが推測できる。該当する世帯は全体の5.8%ではあるものの、とくに支援を届けていかねばならない層として注目する

必要がありそうだ。また、図1からもわかるように、この世帯年収層はかならずしも若年層だけで構成されているのではなく、多年齢層にまたがっている点にも注意を払いたい。

全体の4割を占める世帯年収400～600万円未満の家庭では、ほぼ就労中の父親と同居しており、母親が働いている割合がちょうど5割となっている。次いで3割を占める世帯年収200～400万円未満の家庭でもほぼ同様の傾向が読み取れるが、図1からわかるように、世帯年収200～400万円未満の家庭の保護者年齢の方が、世帯年収400～600万円未満の家庭の保護者と比べ、19～24歳、25～29歳といった若年層の占める割合が大きい点が特徴として指摘できる。

母親の就労率が2番目に高い世帯年収800～1,000万円未満の家庭、3番目に高い世帯年収600～800万円未満の家庭の両群を合わせると、全体の約2割を占める。こちらは、父親の就労

表2 年齢別にみた世帯年 (p<0.00)

	200万円未満	200～400万円未満	400～600万円未満	600～800万円未満	800～1,000万円未満	1,000万円以上	
19～24歳	7	23	10	1	0	0	
	17.1%	56.1%	24.4%	2.4%	0.0%	0.0%	
25～29歳	23	87	90	16	6	1	
	10.3%	39.0%	40.4%	7.2%	2.7%	0.4%	
30～34歳	20	176	225	79	25	5	
	3.8%	33.2%	42.5%	14.9%	4.7%	0.9%	
35～39歳	15	125	204	70	36	17	
	3.2%	26.8%	43.7%	15.0%	7.7%	3.6%	
40～44歳	8	41	64	44	12	11	
	4.4%	22.8%	35.6%	24.4%	6.7%	6.1%	
45～49歳	0	4	2	1	2	1	
	0.0%	40.0%	20.0%	10.0%	20.0%	10.0%	
50歳以上	3	1	1	3	1	0	
	33.3%	11.1%	11.1%	33.3%	11.1%	0.0%	
全体	121	660	834	306	119	46	上段：実数
	5.8%	31.6%	40.0%	14.7%	5.7%	2.2%	下段：割合

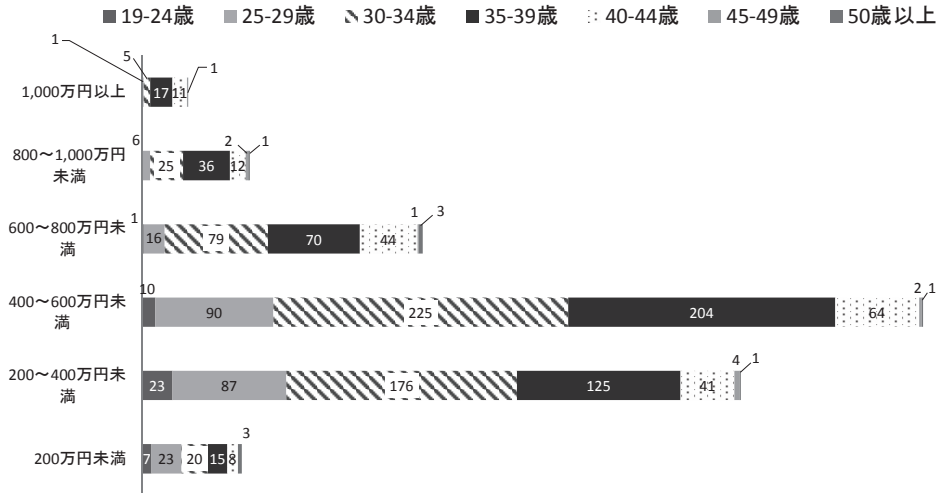


図1 年齢別にみた世帯年収：実数 (p<0.00)

表3 世帯年収別に見た父母の就労，父親との別居，子の就園所と通園所先の状況 (p<0.00)

	母親が就労	父親が就労	父と子別居	就園所	保育所	幼稚園	その他
200万円未満	82 67.8%	48 39.7%	60 49.6%	103 85.1%	88 85.4%	13 12.6%	2 1.9%
200~400万円未満	352 53.3%	595 90.2%	25 3.8%	544 82.5%	362 67.4%	168 31.3%	7 1.3%
400~600万円未満	417 50.0%	778 93.3%	19 2.3%	725 86.9%	368 51.5%	332 46.5%	14 2.0%
600~800万円未満	180 58.8%	277 90.5%	12 3.9%	277 90.5%	169 62.6%	97 35.9%	4 1.5%
800~1,000万円未満	73 61.3%	105 88.2%	10 8.4%	112 94.1%	66 61.1%	40 37.0%	2 1.9%
1,000万円以上	20 43.5%	40 87.0%	2 4.3%	44 95.7%	16 37.2%	25 58.1%	2 4.7%
全体	1,124 53.9%	1,843 88.4%	128 6.1%	1,805 86.6%	1,069 60.2%	675 38.0%	31 1.7%

率が高いことや父と子とが別居している割合が低いこと、さらには就園所率が9割を上回っており、なかでも保育所へ通所する割合が高いことなども考えあわせると、共稼ぎ世帯が多い傾向がわかる。年齢構成としてはどちらの層とも若年層が少なく、30代以上が圧倒的多数を占めている。

全体の2.2%と最も少ない割合の世帯年収1,000万円以上の家庭の特徴としては、保護者の年齢層は30代後半以上でほとんど占められており、ほぼ就労中の父親と同居している。また、母親が就労している割合が50%を唯一下回っており、保育園よりも幼稚園への通園率が高い。

これら保護者の境遇をふまえ、それぞれの層

の子育て活動について分析を進めることにしよう。図2は、世帯年収別に「子育てや家庭での教育で悩みがありますか」とたずねた結果をまとめたものである。世帯年収200万円未満の家庭では、「たくさんある」、「まあまあある」と回答した割合がいずれも最も高く、全体63.1%で悩みがあると答えている。ただし、「ほとんどない」と回答する割合も12.6%と世帯年収1,000万円以上の家庭に次いで高いことから、この世帯年収層ではとくに個人差が大きいことがわかる。また、世帯年収200万円以上から800万円未満にあたるいずれの層でも、「たくさんある」、「まあまあある」をあわせると5割程度となっており、子育ての悩みの量に差異はあまりみられない。

そこで、世帯収入ごとの悩みの特徴を理解するために、その悩みの具体的内容を3つまで選択してもらった結果を世帯年収別に集計してみた。その結果をまとめた表4からは、子育てへの悩みが多いか少ないかといった視点では見えてこなかった悩みの内実が浮かび上がってくる。

有意差⁶⁾ (p<0.05) が確認できた項目だけに着目してみると、母親の就労率が高かった、年

収200万円未満、世帯年収600~800万円未満、世帯年収800~1,000万円未満の家庭では、「子供と接する時間が少ない」、「仕事との両立が難しい」、「子育てに配慮した職場環境になっていない」といった悩みが多くあげられていることがわかる。ワーク・ライフ・バランス⁷⁾をめぐる課題が、子育て不安の大きな要因となっていることを確認することができる。また、「経済的に余裕がない」といった項目は、世帯年収200万円未満の家庭では42.2%、世帯年収200万円以上400万円未満の家庭では33.1%で非常に高くなっている。母親の就労率が最も低かった世帯年収400万円以上600万円未満の家庭でも15.3%と比較的高い。どうやら経済的な側面での子育ての不安を感じる境目は、世帯年収400万円前後にあるようだ。

もう一つ注視すべき点が、年収200万円未満の家庭において、他層よりもとびぬけて「家族(特に配偶者)の協力が無い」、「相談できる人がいない」といった、子育ての不安を解消する方法に困難を抱える家庭が多いことである。「子育てや家庭での教育に関する悩みがあるときは、どのようにして解決していますか」という質問

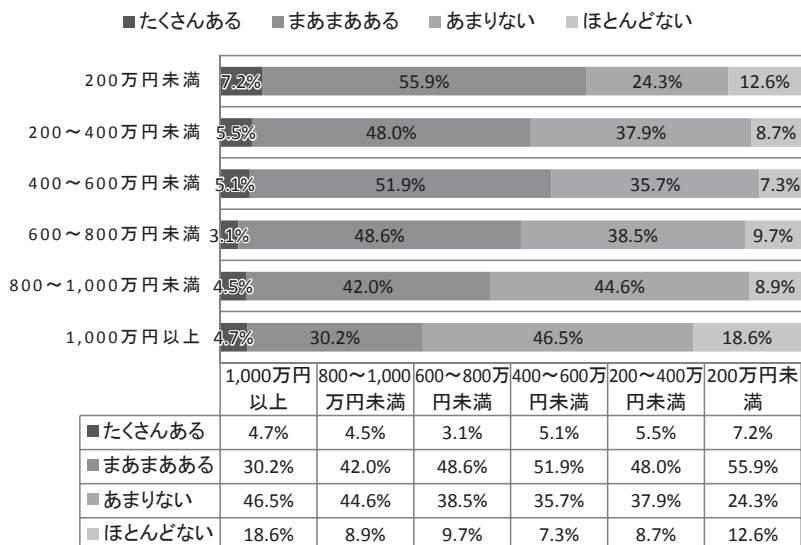


図2 世帯年収別にみた子育てや家庭での教育の悩み p<0.05

表4 世帯年収別にみた子育て・家庭教育の悩み（*印のある項目のみ：p<0.05）

	ほめ方・叱り方が難しい	声掛けが難しい	ついつい手が出てしまう	ついつい大声を出してしまう	子供のやることに口や手を出してしまう	どのように子育てすればよいかわからない	子供に愛情が持てない	子供と接する時間が少ない
200万円未満	24.8%	1.7%	15.7%	46.3%	25.6%	7.4%	0.0%	18.2%
200～400万円未満	38.0%	3.3%	11.7%	44.1%	31.2%	5.2%	0.0%	10.9%
400～600万円未満	33.7%	3.1%	10.6%	48.6%	29.6%	3.5%	.4%	10.8%
600～800万円未満	33.7%	3.3%	9.8%	37.6%	28.4%	3.6%	.3%	20.6%
800～1,000万円未満	31.1%	4.2%	5.0%	42.9%	37.0%	5.0%	0.0%	16.8%
1,000万円以上	39.1%	0.0%	4.3%	43.5%	39.1%	2.2%	0.0%	10.9%
全体	34.5%	3.1%	10.6%	45.0%	30.3%	4.3%	.2%	13.0%

*

*

	自分の時間が持てず、やりたいことができない	仕事との両立が難しい	自分の思いどおりにいかない	育児書どおりにいかない	情報が多すぎてどれが正しいかわからない	家族（特に配偶者）の協力が無い	夫婦（家族）の考え方が違う	家族・親戚から責められる
200万円未満	16.5%	10.7%	5.0%	3.3%	5.0%	18.2%	10.7%	4.1%
200～400万円未満	13.8%	7.1%	4.4%	1.1%	5.3%	9.7%	10.6%	3.5%
400～600万円未満	14.9%	6.7%	6.5%	.8%	4.7%	10.1%	9.7%	2.4%
600～800万円未満	13.1%	14.7%	6.2%	1.0%	3.6%	6.5%	7.8%	0.0%
800～1,000万円未満	22.7%	10.1%	10.9%	.8%	3.4%	8.4%	5.0%	2.5%
1,000万円以上	10.9%	8.7%	4.3%	0.0%	2.2%	4.3%	4.3%	4.3%
全体	14.7%	8.5%	5.9%	1.1%	4.6%	9.7%	9.4%	2.5%

*

*

*

	相談できる人がいない	職場の人の理解がない	子育てに配慮した職場環境でない	経済的に余裕がない	行政の支援がない	周囲に子育てのための施設がない
200万円未満	7.4%	.8%	5.0%	42.1%	2.5%	2.5%
200～400万円未満	2.6%	2.0%	4.7%	33.5%	2.7%	2.7%
400～600万円未満	2.2%	.7%	3.8%	15.3%	2.4%	2.4%
600～800万円未満	1.6%	3.3%	10.5%	6.9%	2.0%	2.0%
800～1,000万円未満	.8%	3.4%	13.4%	4.2%	.8%	.8%
1,000万円以上	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%	4.3%	4.3%
全体	2.4%	1.6%	5.7%	20.4%	2.4%	2.4%

*

*

*

*

に「人に相談をする」と回答した割合と、その相談相手として選択した項目の割合を世帯年収別にクロス集計した表4からも、同様の傾向が読み取れる。すなわち、年収200万円未満の家庭では、人に相談するという行動を取る割合自体が低く、相談相手として自分の親やママ友といった比較的この層の保護者が多く回答した相談相手であっても、他と比べて10ポイント前後も少なく、配偶者や配偶者の親といった項目で

はさらに大きな差異が生じていることがわかる。先に指摘したように、経済的な問題を抱えるこの層では配偶者とのつながりも希薄であることが確認されており、まさしく配偶者や親といった家族との人間関係上の問題と経済的な問題とが、子育て上の不安解消の弊害へとつながっていることを確認することができる。

さらに「子育てや家庭での教育に関する情報は、だれから、または、どのようにして入手し

表5 世帯年収別にみた子育ての不安や悩みを人に相談する割合とその相談相手

* 印のある項目のみ: $p < 0.00$

	不安や悩みを人に相談する	配偶者	自分の親	配偶者の親	ママ友
200万円未満	76.9%	24.8%	57.0%	9.1%	50.4%
200~400万円未満	88.3%	68.6%	69.1%	23.9%	60.0%
400~600万円未満	90.8%	75.1%	69.7%	22.3%	66.4%
600~800万円未満	89.2%	76.8%	67.3%	20.9%	58.8%
800~1,000万円未満	91.6%	73.1%	71.4%	26.9%	65.5%
1,000万円以上	93.5%	87.0%	71.7%	26.1%	73.9%
全体	89.1%	70.5%	68.6%	22.2%	62.5%
	*	*	*	*	*

表6 世帯年収別にみた子育てや家庭での教育に関する情報の入手先 $p < 0.05$

	家族	ママ友	保育士	幼稚園教諭	テレビ・ラジオ
200万円未満	43.0%	52.1%	33.9%	5.8%	9.9%
200~400万円未満	60.9%	64.2%	28.8%	10.6%	23.2%
400~600万円未満	56.5%	70.6%	24.3%	14.5%	25.1%
600~800万円未満	55.2%	66.0%	27.8%	11.1%	21.2%
800~1,000万円未満	55.5%	71.4%	27.7%	16.8%	21.0%
1,000万円以上	69.6%	76.1%	13.0%	19.6%	26.1%
全体	57.1%	67.0%	26.7%	12.5%	22.8%

ていますか」という質問の回答を世帯収入別に分析した表6からも、世帯年収200万円未満の家庭の特異さに気づかされる。「家族」や「ママ友」、「テレビ・ラジオ」といった項目が、他と比べて10ポイント以上も低く、子育てに関する情報の入手先の選択肢が少ないことがわかる。ただし、保育士から情報を得ている割合は、この世帯年収層では85.7%の家庭で保育所に通わせているとはいえ、他と比べると高い。家族やママ友といった近親の者とのつながりが相対的に弱い傾向がみられる世帯年収200万円未満の家庭にとって、保育士からの情報は子育てや家庭での教育の方法を学ぶ重要な機会となっているケースが多いことがうかがえる。

ここまであたかも経済的な問題だけが子育て

不安の要因となっているという印象を強く受けがちだが、そうではない。たしかに子育てに関わる悩みについては、現在の境遇が要因となっている。しかし、図3に示したように、子育てへの苦手・苦痛の意識を世帯年収とクロス集計してみると、はっきりとした相関を確認することは難しい。世帯年収200万円の保護者がかならずしも子育てを苦手・苦痛だと「とても思う」「まあまあ思う」という回答を多く寄せているわけではなく、「とても思う」は世帯年収1,000万円以上の保護者の方が高く、「とても思う」「まあまあ思う」を合算した割合も、世帯年収200万円から400万円未満、400万円から600万円未満の家庭の方が高い割合を占める結果となっている⁸⁾。

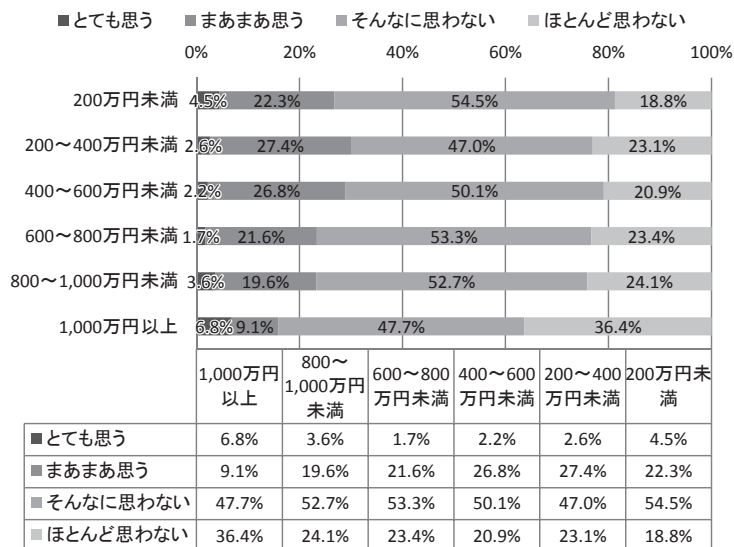


図3 世帯年収別にみた子育てへの苦手・苦痛意識

子育てについての悩みを越え、子育てが苦手だとか、苦痛だとかといった意識をもつ段階に至っている保護者の特徴をさらに解析してみると、現在の境遇よりも、保護者自身が親になる前に体験した子育てに関わる体験や、親自身が養育された家庭での教育経験との間に相関性を確認することができた。次節では、こうした側面に着目しながら分析を進めていくことにしよう。

3. 保護者になる前の経験と子育て活動への意識の関係性

図4は、「自分の子供を育てる前に、小さい子供に食べさせたり、寝かせたり、おむつを替えたりした経験はありますか（中学校のときの保育体験・職場体験などは除きます）」とたずねた回答別に、子育てや家庭での教育の苦手・苦痛の意識を分析したものである。子育てに関わる経験が「まったくない」と回答した保護者の間で、「苦手・苦痛だと思う」、「まあまあ苦手・苦痛だと思う」が3割を超え、相対的に高い割合となっていることがわかる。その理由として最も多くの保護者が選択したのが「要領よ

くできない」(302名選択)⁹⁾であり、二番目に多かった「やりかたがわからない」(148名選択)と比べると2倍に上る。一方、子育てに関わる経験が「よくある」保護者の約3割が、「苦手・苦痛だとほとんど思わない」と応えており、「苦手・苦痛だとそんなに思わない」も含めると約8割がそうした意識を持っていない。つまり、子育てに関わる経験が後の子育て活動の支えになっているということがわかるだろう。

表7からわかるように保護者の45.6%とおおよそ半数が子育て経験を「まったくない」と回答しているだけに、こうしたデータ結果は見逃すことはできない。子育て経験の差異は、家庭での兄弟姉妹の数に依ることが大きく、また同年齢集団での活動を基本とし、時空間的な制約も受けやすい学校教育では補うことが難しい類いの経験でもある。そのため、中学生のジュニアリーダーによる子ども会活動の支援といった地域活動や子育てボランティア活動、社会教育施設等でのより年少の子どもの世話をするといった体験活動を積極的に推進していかねばならないだろう。また、こうした青年の取り組みが、ひいては「次世代の」子育て支援活動のしやすさ

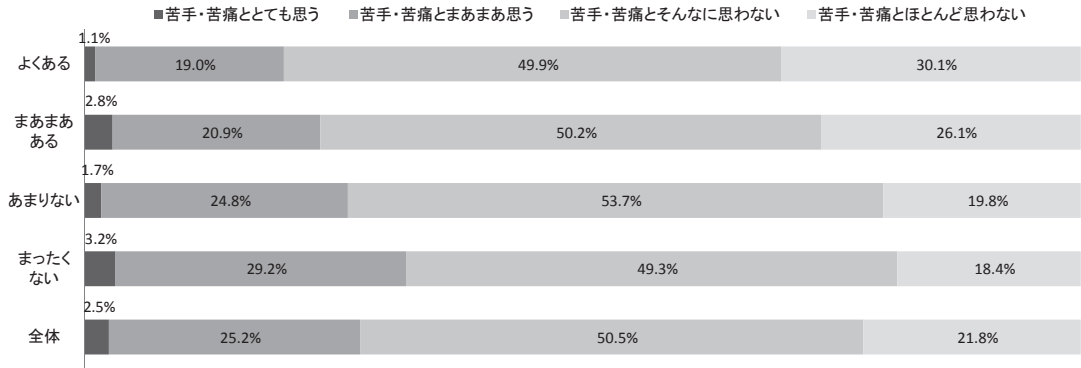


図4 子育て経験別にみた子育てへの苦手・苦痛意識 p<0.00

表7 自分の子どもを育てる前の子育て経験

よくある	まあまあある	あまりない	まったくない
320	361	449	946
15.4%	17.4%	21.6%	45.6%

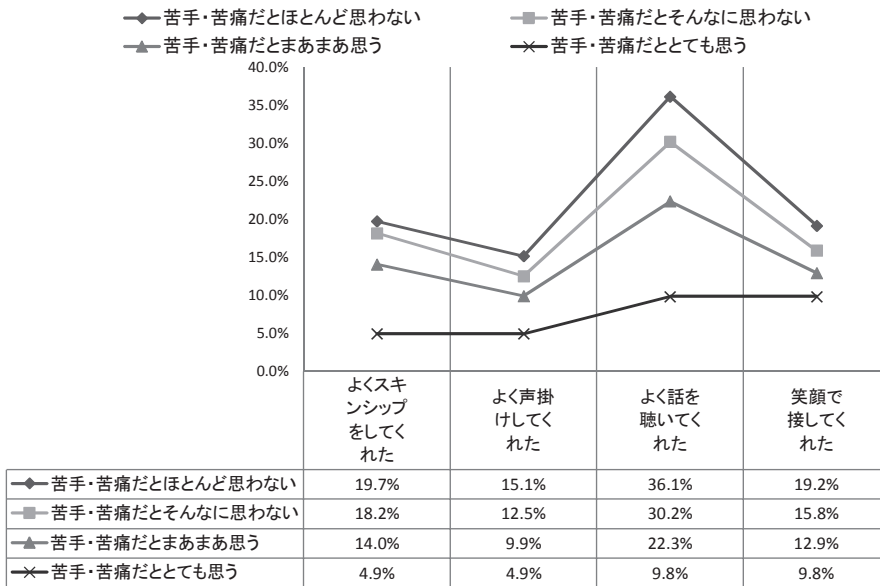


図5 子育てへの苦手・苦痛度別にみた被養育経験 (よい印象群) p<0.05

につながっている可能性を示している調査結果だということは、強調しておきたい。

次に、保護者の被養育体験に目を移してみよう。まず、子育てへの苦手・苦痛の意識と保護者の被養育経験とをクロス集計した結果のうち、有意差が確認できたものだけを抽出し、それら

の項目のなかで、図5には保護者がその被養育経験に良い印象を持っている項目、図6には保護者が被養育経験に悪い印象を持っている項目をふり分け、グラフ化した。

図5にあるように、子育てへの苦手・苦痛をあまり感じずに子育てをしている保護者ほど、

子どもの頃に親から「よくスキンシップをしてくれた」、「よく声掛けしてくれた」、「よく話を聴いてくれた」、「笑顔で接してくれた」といった良い印象の被養育経験をもつ割合が高いことがよくわかる。また逆に、子育てへの苦手・苦痛意識を「とても感じる」と応えた保護者が、自分の被養育経験について好印象を持っている割合はいずれの項目でも他と比べて低く、すべて10%を下回っている。なかでも、「よく話を聞いてくれた」という項目での差は大きく、「ほとんど思わない」と応えた層と比べると、20ポイント近くも選択する割合が少なくなっている。

一方、図6をみると、一部例外はあるものの、総じて子育てへの苦手・苦痛意識を強く持つ保護者ほど、子どもの頃に親から「やることにいちいち口出しされた」、「ちょっとしたことでもよく叱られた」、「よくたたかれた」、「よく放っておかれた」といった自らの被養育経験に対し、悪い印象を持つ割合が高いことがわかる。とくに、「よく放っておかれた」や「よくたたかれ

た」といった程度によっては命の危険にもつながりかねない行為に該当する項目については、子育てへの苦手・苦痛意識を「とても感じる」と応えた保護者が著しく多く、他層の2倍以上にもなる。

こうした2つの集計結果は、保護者自身の被養育経験が、自らの子育てを肯定的にとらえるか、否定的に捉えるかという、子育てに対する自己評価に少なからぬ影響を与えていることを示している。もちろん、このデータだけでは、育てられるプロセスの中で家庭での教育スタイルを親から継承しているかどうかまでは判断は付かない。しかし、少なくとも親からあまり良いとは思えない養育をされたと感じている保護者にとって、自らの子育て活動に対してもまた、肯定的な印象を持つことができないでいる様子にははっきりとがわかる。

しかも、その悩みや、苦手・苦痛の意識について自分の親に相談したところで、共感されることはあろうが、解決につながるような助言や

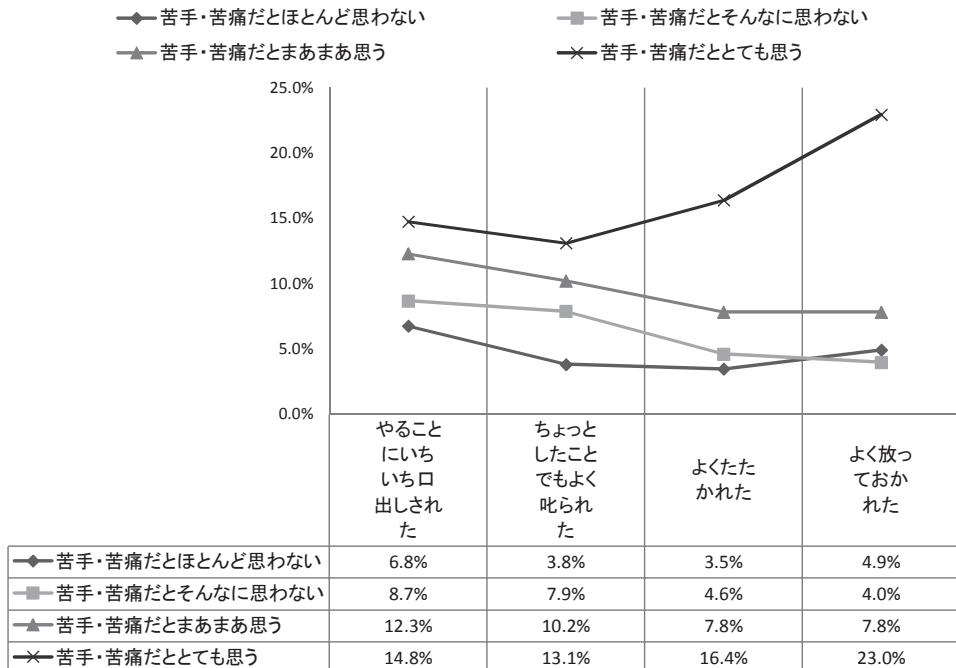


図6 子育てへの苦手・苦痛度別にみた被養育経験（わるい印象群） $p < 0.00$

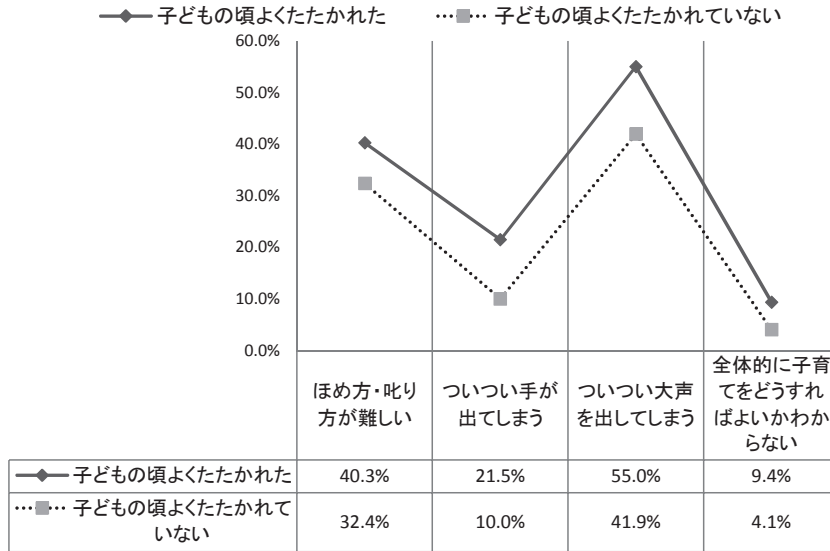


図7 被養育経験（よくたたかれた）別にみた子育ての悩み p<0.05

ヒントを得られるかどうかは、心許ない。そうした意味でも、子育てや家庭での教育に関する経験や悩みに関するアドバイス等は、家族やごくわずかな近親の者どうしではなく、様々な場や多様な人々との間で交換される必要があるだろう。保護者どうしが子育てについて意見交流し合うような体験を積み重ねることこそ、子育ての不安を解消する重要な方策の一つであることが、こうしたデータからもよく理解することができる。

最後になったが、一般に、子ども虐待の負の連鎖¹⁰⁾が指摘される場所である。そのことを直接確認する質問項目は本調査にはない。しかし、「よくたたかれた」や「よく放っておかれた」といった虐待につながる可能性の高い被養育経験と子育てに対する苦手・苦痛の意識との間で特に強い相関関係が確認されているため、もう少し補足的に分析を重ねることとした。

図7は「よくたたかれた」、図8は「よく放っておかれた」というそれぞれの被養育経験の有無と、子育ての悩みの具体的内容についてクロス集計し、有意差が確認できた項目だけをまとめたものである。複数の項目で、「よくたたか

れた」、「よく放っておかれた」という悪い印象の被養育経験をもつ保護者の方が、悩む割合が高くなっていることがわかるだろう。なかでも、「よくたたかれた」と回答した保護者の方がそうした経験を持たない保護者よりも、「つつい手が出してしまう」ことを悩む割合が2倍となっているといった結果は、教育スタイルが世代間で継承され、行為が繰り返されている可能性を窺わせる。

重ねての指摘にはなるが、本節で分析した結果は、親から受けた子育て、家庭での教育と同じ行動を子が繰り返していることを必ずしも証左するものではない。しかし、保護者自身の被養育経験を良好な経験だと感じているかどうかで、自らの子育て活動に対する不安の強さが異なっていることをふまえれば、保護者自身の被養育経験を振り返って客観視することや、特にあまり良好な経験をもたない保護者に対しては自らの被養育経験とは切り離して、自らの子育てを見直したりするなどの“親としての学び”の機会を準備しておく必要があることは確かだ。

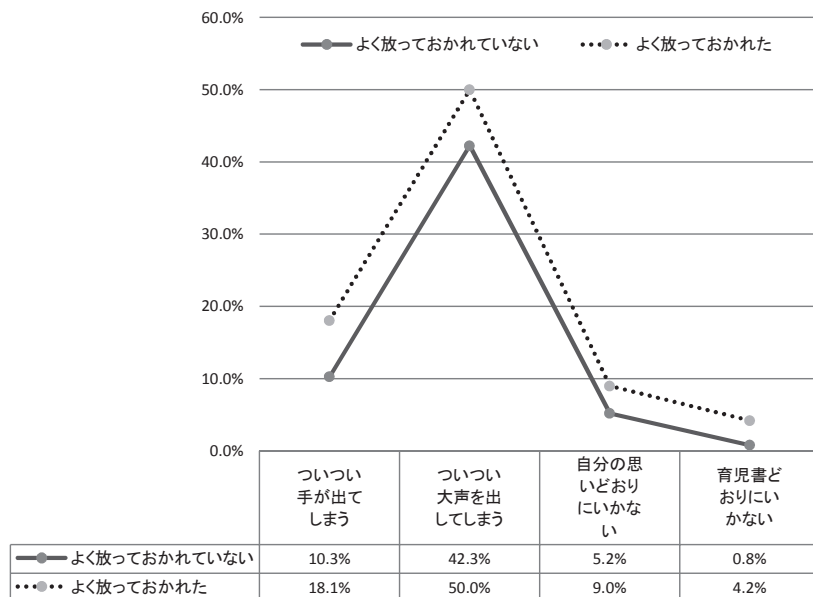


図8 被養育経験（よく放っておかれた）別にみた子育ての悩み $p < 0.05$

4. ま と め

変化の激しい今日にあって、家族のあり方や地域社会の状況は様変わりをしており、子どもの生活環境や子育て環境も昔のそれとは大きく異なる。しかも、かつて当然視されていた子育ての常識のなかには、人間の発達に関わる科学の進化によって不確かさが指摘されているものも少なくない。こうした何が子育てや家庭での教育にとって正しいことなのかを判断しにくい状況の中では、子育てや家庭での教育に不安を持つことは当然のことである。そこに経済的な困難さや家庭環境の複雑さが加わればなおさらだ。だからこそ、その不安を保護者と共有し、ともに試行錯誤しあう「他者」の存在が重要となってくる。

しかし、経済的に困難さを抱えている保護者は子育ての悩みを相談できる相手や機会にも恵まれていないという本調査の結果からもわかるように、「他者」が、家族内に限定されてしまっていることによって、家族関係の破綻が経済的困難と子育て不安の双方を同時にもたらししてい

ることは注意しなければならない。

また、保護者自身の被養育経験についての印象の善し悪しが、自らの子育て活動の得手不得手の意識（苦手・苦痛の意識の強弱）とつながっている傾向は、家族という閉鎖的な人間関係とは離れた位置にいる「他者」からの子育てアドバイスの有効性と重要性を示唆している。家庭教育支援のつながりが多数であればあるほど途切れにくく、多様であればあるほど教育スタイルの負の連鎖を食い止める力となるだろう。その「他者」とのつながるきっかけを多数かつ多様につくっていくことが、家庭教育支援に求められている。

その「他者」とは、具体的に何人とつながっていればよいのだろうか。最後にその目安となるデータを示しておきたい。「近所にお子さんの世話をしてくれたり、子育てや家庭での教育の相談にのってくれたりする人」の数をたずねた結果と、「子育てや家庭での教育で悩み」（図9）、「子育てについて苦手・苦痛の意識」（図10）をたずねた結果とをクロス集計した。これまでの調査結果の傾向と同じく、相談相手が多

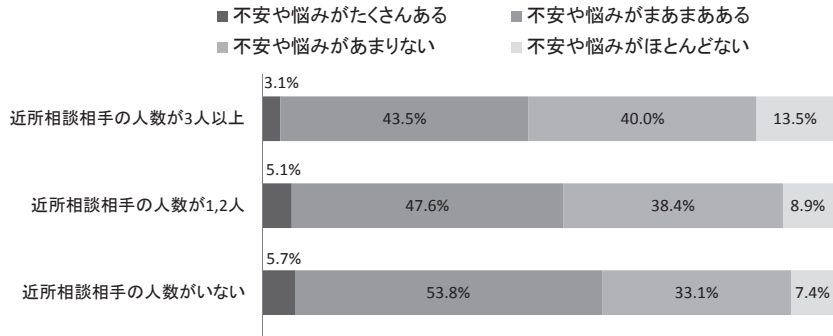


図9 相談相手の人数別にみた子育てに関する悩み p<0.05

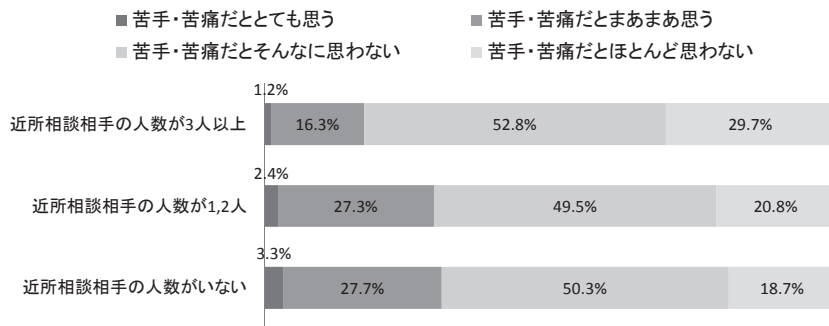


図10 相談相手の人数別にみた子育てへの苦手・苦痛の意識 p<0.05

くいる保護者のほうが、いない保護者よりも、子育ての悩みを抱えていたりや苦手・苦痛意識がもつ人の割合が少ない。しかも、子育てについての苦手・苦痛を感じている割合においては、相談者が1, 2人いる保護者と相談相手がない保護者とではそれほど差がないものの、相談者が1, 2人の保護者と3人以上の保護者との間では、12ポイント以上も差があり、「苦手・苦痛だとほとんど思わない」と回答する保護者も1割近く多い結果となっている。つまり、この調査結果からは、子育てを支えあう仲間は3人以上がより望ましいことが読みとれる。

この3人以上の多様な「他者」とつながるために、それぞれの地域にあった仕組みや学習機会があればよいのか、その具体策の検討については今後の課題としたい。

謝辞：今回のアンケート調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 拙稿「子育ての不安を軽減する家庭教育支援に関する一考察 (1)―広島県における「子育てや家庭での教育に関するアンケート」の基礎的分析―」広島経済大学研究論集38(1), 1-12頁, 2015。
- 2) ここでいう「保護者」とは、本アンケート調査の記入者をさす。なお、内訳としては母親97.4%。父親2.3%、その他(祖父母等)0.3%であった。
- 3) ほぼ同年代の子を持つ身近な子育て仲間に使われる通称。
- 4) 広島県教育委員会生涯学習課が、平成27年度に3歳児を幼稚園、保育所、認定子ども園に通園所させている保護者1,555名に実施した「家庭教育に関するアンケート調査」。
- 5) 50代の保護者のうちおよそ半数は父母以外の保護者であった。
- 6) ピアソンの積率相関分析を用いた。
- 7) この用語は、内閣府『仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章』(平成19年12月18日)に基づき使用した。
- 8) 図3のクロス集計の有意率は0.06。
- 9) 2つまでの複数選択により回答を求めた。
- 10) 山縣然太郎「ライフサイクルと虐待の世代間連鎖」(特集 母子保健と子ども虐待の未然防止)母子愛育会『保健情報』(67), 11-13頁, 2013年。